

## アマースト大学の保健講義資料に関する一考察

木村吉次\*

### A Study on the 'Syllabusses' of the Health Lectures in Amherst College

Kichiji KIMURA

#### Abstract

The purpose of this study was to analyze the 'Syllabusses' of the Health Lectures in Amherst College, which were edited by Edward Hitchcock, Jr. from 1876 to 1888, and compare the contents of the sayllabuses with those of G. A. Leland's lectures of the theories of physical education at the National Normal School of Gymnastics in 1880-81 (estimated) to identify the characteristics of modern physical education introduced into Japan.

The results of this study are as follows :

- 1) Among the text books and other bibliography at the National Normal School there were some fundamental books of medicine written by the same author that the syllabuses cited.
- 2) Both the Note of physical education theories by Leland and the 1876 Syllabus (A Course of Instruction in the Department of Physical Education and Hygiene in Amherst College) were described theoretically as well as systematically. However, the former has a character of the appllied side of the medical knowledges to physical education while the latter has that of understanding the facts and theories of health.
- 3) The former relatively relied on many of the statements and facts of the same author as the latter referred to. At the same time the latter also included many statements and facts from other scholars, such as Elwin Baelz, whom E. Hitchcock did not owe. It was a unique viewpoint to discuss heredity, climate, and social customs in order to introduce modern physical education into Japan.
- 4) Although the latter manifested the faith of Christianity, the former restrained it.

#### [ I ] 問題の設定

1878 (明治 11) 年 10 月 24 日に設置された体操伝習所がわが国学校体育の基礎を確立するの

に大きな役割を果たしたことについては、これまで多くの研究が行われてきた<sup>1)2)3)4)5)6)</sup>。しかし、体操伝習所がわが国学校体育のモデルとして導入したアマースト大学の体育については、

---

\* 教授

ある程度の研究は進められてきたものの<sup>4)5)6)7)8)</sup>, 必ずしも十分に解明されたとはいえないものがある。

アマースト大学の体育の形成を考えると、初代衛生・体育学教授フーカー (John W. Hooker, M. D.) の後を襲って1861年席に就いたヒッチコック博士 (Edward Hitchcock, M. D.) が最も重要な役割を果たした人と云える。彼は、この後実に50年という長期間にわたってこの職にあったのである。そして、わが国の体操伝習所設立に際して御雇教師として招聘されたリーランド (George A. Leland) 博士は、アマースト大学卒業後ハーバード大学医学部を卒業した人であるが、アマースト大学在学中ヒッチコック博士の管理下で体育を行っており、1874年クラスの体操キャプテンをつとめ、後に E. H. Barlow 教授編の 'The Gymnastic Handbook of Amherst College' 1875 にリーランドが1874年クラスで編成した「亜鈴体操」が収録されたという経歴をもっていた人物である。

ともあれ、リーランドが E. ヒッチコックの教え子であったこと、しかもその教え子の中でも最も中心的に体育を実践した経験があり、クラスでは指導的な役割を果たし、ハーバードで医学を修め、医学的知識をもっていた。こうしたことを考えたとき、リーランドが日本に導入した体育は、リーランドのアマースト大学時代の経験と知識に裏付けられていたことは否定できない事実であるが、しかしながら、そこに E. ヒッチコック博士はどのような影響を与えていたのかを明らかにできるならば、リーランドによって日本に導入された体育の性格をより一層明確にできると期待される。本研究は、こうした視角から E. ヒッチコックがアマースト大学において行った講義内容、すなわち保健講義の内容の一端を明らかにして、それと G. A. リーランドが体操伝習所において行った体育論講義の内容と比較し、そこでの共通性と差異とを検討して、リーランドの体育論の特徴を明確にしようとするものである。

ただし、この方法には限界があることを断っておかなければならない。第一にはアマースト

大学の保健講義は、一般学生を対象とした授業であるのに対して、体操伝習所におけるリーランドの体育論講義は、体育教員養成のための専門教育として行われた授業であったという点において、はじめから比較の対象がずれていることである。そして、第二には体操伝習所の専門教育では、体育論講義以外にも解剖学・生理学・健全学等の講義も行われていたわけであるから、アマースト大学における E. ヒッチコックの保健講義と比較するならば、それらの講義全体も含めて比較することが妥当だと云えよう。しかしながら、リーランドの体育論講義は翻訳され、筆記されて残されたものの<sup>9)</sup>、他の講義内容は不明である。ただし、それらの講義で使用された教科書が明らかにされているので<sup>10)</sup>、それについての若干の考察は可能であり、上記の考察を補える。

以上のように限界のある方法ではあるが、体育論は、元来医学的な立場からの健康論を大きな理論的柱としていることを考慮したとき、この比較を通して考察することによって、ある面においての G. A. リーランドの体育論の特徴を明らかにすることができると期待されよう。

## 〔II〕アマースト大学の保健講義資料

アマースト大学で衛生・体育学教授の教授職を設置するとき「この教授は時々衛生、体育、およびその他の生活と健康に関する諸問題について講義を行うものとする。それには解剖学・生理学についての大意が含まれる<sup>10)</sup>」という一ヶ条が確認されていた。

したがって、衛生・体育学教授は体育の実際指導と健康管理以外に保健（体育）講義を行ったのである。初代のフーカー教授は、1860年8月6日から翌1861年7月8日までと在任期間が短かったため、十分実績をあげられなかった。フュス (C. M. Fuess) は、アマースト大学史の中で「フーカーは、彼自身健康でなかったし、また他者の健康増進を促すような資質を十分備えていなかった<sup>11)</sup>」と語っている。フーカーが保健講義を実際に行ったかどうかは、アマースト大学の体育に関する報告書には記載されて

いないので不明である。

ヒッチコックの代になって保健講義が恒常的に行われたことは明白である。彼は、1865年から新入生のクラスに講義を行ったようである<sup>12)</sup>。その講義内容は、衛生、食物と消化、筋の扱い、呼吸・発声器官と新鮮な空気、皮膚、脳と精神、眼、生殖器官、たばこ、アルコール、性などに関するものであったとされている<sup>13)</sup>。

ただし、こうした講義内容も実は時代によって変化しているのである。その講義内容を知る手がかりとしてわれわれに残されているのは、E. ヒッチコックが保健講義用に用意した、Course of Instructions, Abstract, Syllabusなどを冠した保健講義の資料である。題名は異なるが、それらは講義資料と概括できるようなものである。筆者が調査できたのは、次の7点である。

- 1) 'A Part of Course of Instruction given in the Department of Physical Education and Hygiene in Amherst College', 1876.
- 2) 'An Abstract of Lectures on Health to the Freshmen of Amherst College', 1880.
- 3) 'A Syllabus of the Health Lectures in Amherst College', 1888-9, 1888.
- 4) A Syllabus of the Health Lectures in Amherst College, 1891-92, [3d. ed.], 1891.
- 5) A Syllabus of The Health Lectures in Amherst College, 1893-1894, [4th. ed.], 1893.
- 6) A Syllabus of Health Lectures in Amherst College, 1896-97, [5th. ed.], 1896.
- 7) The Subjects, Statements and Facts upon Personal Health used for The Lectures given to the Freshman Class of Amherst College, [6th. ed.], 1899.

アマースト大学の歴史を叙述したダック(Thomas Le Duc)は「アマーストで使用され、後の1876年になってやっと出版された衛生の教授要綱は、これをあなたがたの肉体と靈魂において神を賛えなさい、という聖句で始められている<sup>14)</sup>」のに注目していた。ともあれ、この資料に続いてAbstractが印刷されているが、こ

れはその後版を重ねる。そして、1888年にはSyllabusになり、これがさらに改訂を続けたのである。本研究の目的に即して云えば、G. A. リーランドの来日が1878(明治11)年9月6日で、『李蘭士氏講義体育論』の講義筆記の成立が1880年4月から1881年6月末頃までの間の時期であったと推定されていること、そして、リーランドの離日が1881年7月3日であったことを考えるならば<sup>15)</sup>、E. ヒッチコックのG. A. リーランドへの影響の可能性が考えられるのは、1), 2)の資料に限られる。したがって、こゝでは1), 2)の資料とG. A. リーランドの『李蘭士氏講義体育論』の内容を比較検討すれば十分であるということになるのだが、E. ヒッチコック自身の講義内容の変化を少し追求する意味で3)の資料まで取り上げることにする。

そこで、まず最初に1), 2), 3)の資料の内容構成と『李蘭士氏講義体育論』の内容構成との比較検討から始めることにしたい。それぞれの内容構成を主として目次によって示すことにする。これは次頁の表のようにまとめることができる。

この表について考察した結果、以下の点が明らかになる。

(i) E. ヒッチコックの資料について云えば、1)の場合、人体の解剖学・生理学・人体測定などの事実・法則等がある程度体系的に教授することを意図した内容構成となっていることが読み取れる。この点は、ヒッチコック自身が「本書の内容は、人体解剖・生理のレジュメではない。教科書でもない。それは諸々の事実や法則の集積であることを示すものであって、最高に権威があると思われるものから集められ、アマースト大学のこれらの問題に関する教科書や講義と関連して使用されるように整理されたものである<sup>16)</sup>」とまえがきで語っていた。

(ii) これらが2)では非常に大きな変化を遂げている。大学生の生活と密着した内容、すなわち勉学に勤しむ学生の健康の保持、増進に必要な知識を与えることに焦点を合わせ、内容を精選したものである。こゝでは、体育の必要や運動時の注意、たばこ、過労、梅毒など、極

## 講義内容の比較

李蘭土氏講義体育論	A Part of the Course of Instruction	An Abstract of Lectures	A Syllabus of the Health Lectures
緒言 遺伝の事 風土の関係を論ず 風習の事 体操 体操の身体各部に生ずる効果 第一筋関係 第二血液循環系統に就て体操の効果を論ず 第三呼吸器に就て体操の効果を論ず 第四栄養機に就て体操の効果を論ず 第五皮膚に就て体操の効果論ず 第六神経系統に就て体操の効果を論ず (体育の分量) 体育歴史  (未定)	人体の解剖生理 あなたがたの肉体と靈魂において神を賛えなさい 人間(ヒト)の特徴 人間の身体の常数 人間の生命力 平均全命 動物の寿命 出生率 寿命の延長 死亡率 骨 筋 筋の動作に影響を及ぼす期待 注意と視覚 筋・運動に関する事実 消化 循環器 呼吸のメカニズム 皮膚 体温 触覚 味覚 嗅覚 視覚 聴覚 女性生殖器 男性生殖器  (102ページ・索引5ページ)	まえがき 体育館の義務 病欠 筋運動 たばこ 皮膚と入浴 皮膚と体温 肺と空気 脳と神経 大学生の生活時間 過労 眼 梅毒の恐しさ  (43ページ)	まえがき 序論・総論 体育 筋の注意 食物と消化 アルコール たばこ 皮膚 呼吸器と新鮮な空気 脳と精神 眼 生殖器  (38ページ)

めて具体的な問題がとり上げられている。ページ数でも 1) が 102 ページもあったのに対して、43 ページと半分以下に減らされている。1) がほとんど学者の発言や学説、客観的なデータを並べて、著者の論述部分は非常に少なかったのだが、これではかなり著者自身の論述の内容が増えている。この傾向は 3) の Syllabus にも引継がれている。2) では Abstract の成り立ちに何ら言及していなかったが、3) では次のように述べている。

「この冊子は過去数年間にわたって、私が大学入学直後に新入生に対して行ってきた何回かの講義と親しく語り合ったことの産物である。それらの話は話の題材に関するレジュメのよう

に入念に考えられたものではなかったし、また好意的でないような批判を受けるかも知れないものであった。というのもその大部分が意見や経験的な事柄であって、厳密な科学的ないしは統計的な限定をともなったものではないからである。

それと同時に、それらの話は多くの標準的な生理学、衛生学、社会的原理を含むように企図されている。大学生は、それによってよりよく自らの健康を維持し、自らの身体をよりよく理解し、取り扱うことによって心身のすべての能力を最大限に活用することが期待されよう。

これらの講義で採用した計画は、包括的な主題をとり上げ、一つの見出しの下でいくつかの

トピック—最重要と見うけられるような—を学生が知るように配当することである。……<sup>17)</sup>」

こゝには、E. ヒッチコックが学生になじみやすい、身近なところの話題をとらえながら、しかもできるだけ学問的な裏付けをもった内容のものにしようとしていた講義の意図が明白に見られる。この点は同じく具体的な問題を取りあげながら3)においては再び強化されている。

(iii) さて、次にこれら E. ヒッチコックの内容と G. A. リーランドの講義内容とを比較してみよう。先ず最初に気づくことは、当然のことなのだが、リーランドの場合〈体育論〉であることからして、E. ヒッチコックの保健講義とは異って、全体として運動の価値を説いた部分が断然多くなっていることである。このことを認識した上でさらに内容に立ち入ってみると、古今の思想家、体育家などの言説とともに、多くの医学者たちの学説や主張を引用しつつ、体育の意義を体系的に論述していることが分る。その点では E. ヒッチコックの場合自らの論述を極めて抑制したかたちではあったが、科学的なデータや事実を多く挙げ、医学者たちの学説と主張を多く掲げ、保健講義を学問的な立場から体系的に行うように編成した資料1)と共通している面がある。この体系的な取扱いということは、G. A. リーランドが講義を行った体操伝習所が体育教員の養成という専門教育の機関であったところからも要請されたところであったと考えられよう。しかし、リーランドの場合、解剖学・生理学等の医学的知識が体育に向けられていた点で、応用的な面が強かったのに対して、ヒッチコックの場合かなり基礎的事実の追究の面が強く出ていた。

保健講義としては軌道修正が必要であったのか、E. ヒッチコックの2), 3)の資料となると、それらは通俗的ともいえるほどの、いわば学問的体系にとらわれない、直接に学生が健康生活を営むために役立つ知識を提供するという体裁のものになっていて、G. A. リーランドの講義の内容の編成とは非常に性格を異にしていた。

(iv) 次に指摘しておかなければならないのは、キリスト教の精神である。これについて筆

者は以前にも言及したことがあるが<sup>18)</sup>、G. A. リーランドは、体育論講義の最初のところで、「抑世界の創造に就きては、種々各論ある事なれども、余は固より神の業なるを信ず。而して其初めに当て人類に三の區別したる性質を与へたり。第一、道德性、第二、智性、第三、体性、是なり。又此三性を靈魂、心、体と称する事あり。今此區別を論ずるは哲学に関する事なれば、余は其區別を説述せず。如斯各性ありて異りたる作用を為すと雖も、余相待て三を修めざるべからず。故に各其一を欠くときは之を充全の人と云ふを得ず。…<sup>19)</sup>」と説き起していた。こゝにはキリスト教の立場が明確に言明されていないが、キリスト教的世界観、人間観に立っていることは明らかである。これが E. ヒッチコックの資料となると前述したところでも引用したように、キリスト教主義大学 (Christian College) としてのアーマスト大学のキリスト教精神が1)の資料には明瞭に見出される。

しかし、T. L. ダックは「学生がよりよく神に仕え、神を敬うようにするために学生の健康を増進することがその目的であったとすれば、身体の活力の高まりが信仰復興運動の衰退することとほぼ正確に同時的に起ったことが見出せるのは苦々しい皮肉ではあったに違いない<sup>20)</sup>」とアーマスト大学の衛生・体育について評している。それでも E. ヒッチコックの資料は、2), 3)においてもキリスト教信仰の立場が明確に表明されていたことが明らかである。例えば、2)では新入生に向って「君たちの宗教生活は主として君たちの信仰と内心の信念とにある。しかし、大学では外部にあらわされる形や慣行が強く影響する。君たちは大学にあって、君たちの教会は安らげるところだから、宗教的儀式、習慣、しきたりは廃されるべきではない。真の靈的生活は、安全装置であるだけだ。入学者の約40%は卒業に至らないのだ<sup>21)</sup>」と述べていた。そして、3)では最終の生殖器官の箇所では「聖書は不貞についてどう述べているか」の見出しの下でほぼ1ページを費やしている<sup>22)</sup>。

こうして、E. ヒッチコックの場合1), 2),

3) の資料を通じてキリスト教主義の立場が明瞭にされているわけだが、リーランドの体育論の基本にはあったけれども、そこでは日本の官立学校という制約も意識されたかも知れないが、とにかく非常に抑えたかたちで述べられていたに過ぎなかった点において相違が見出される。

### 〔III〕 典拠の比較

前節では G. A. リーランドの体育論講義の内容と E. ヒッチコックの保健講義の内容を目次項目を中心として比較検討した。その結果、ある程度リーランドの体育論講義の特徴が E. ヒッチコックの保健講義資料と比較して明らかになった。そこでこれらの比較をさらに深めるために、次のそれぞれの講義がどのような人の学説、言説に基づいて成り立っているかをみることにしよう。リーランドの場合「『プレイキイ』氏著『壮健法』に曰く、…<sup>23)</sup>」のように引用しているし、ヒッチコックは“Weight of our *infant* at birth, 6<sup>250</sup> pounds. — *Quetelet*.<sup>24)</sup>”とか、“Helmholz calculates the *internal mechanical work* of a living man at 715,000 foot pounds per day.…”<sup>25)</sup>、さらには“Dr. Parkes says that from 12 to 16 *gallons of water* per day should be allowed to every person for eating and bathing.”<sup>26)</sup>と云ったようなかたちで引用している。ヒッチコックの場合 1) はほとんどこうした引用の集積なのである。

ともあれ、引用されているものは、思想家の言説であるとか医学者の学説や統計的数字とか、学術誌の論文、政府の報告書など種々のものである。これらをこゝではリーランドやヒッチコックの講義の「典拠」ということで一まとめにして、さきの講義内容の項目に関して、それぞれどれぐらい参照されていたのかを表に整理してみた。それが表 1～4 である。(この中には名前のミスプリと思われるものがあるが、確認できないのでこゝでは一応別人にしておいた。)

i) 表 1 は資料 1) について整理したものである。参照回数 224、典拠数 94 であるが、この

うち参照回数の多い典拠をみると、

Flint	38
Holden	10
Manshall	10
Bain	9
Prof. Huxley	9
Cycl. Anat. and Physiol	8
Carpenter	7
Draper	6
Prof. Quain	5
Pettinkofer	5
Parkes	5
Helmholtz	5
Quetelet	4
Quetelet & Danson	4
Mass. Board of Health	4
West. Review, 1875	4
Cleland	4

4 回以上引用されているのは上記のようであるが、最高のフリント (Flint) は生理学の広い範囲にわたって引用されている。次に多いホルデン (Holden) は骨の解説のところで参照され、次のベイン (Bain) は感覚器官の説明で挙げられて居り、マーシャル (Marshall) はフリントとともに筋の説明で引用されている。ハクスレイ (Prof. Huxley) は循環器、カーペンター (Carpenter) とクエイン (Prof. Quain) はヒトの特徴、ドレイパー (Draper) は人体の常数、ペッテンコファー (Pettinkofer) は体温、パークス (Parkes) は筋運動や消化、ケトレー (Quetelet) とダンソン (Danson) は人体の常数といった箇所では集中的にとりあげられている。

ともかく、実に多くの典拠が挙げられ、それぞれ専門の分野に関して引用されていることが分る。

ii) 2), 3) の資料を同様に整理して見ると次のようである。[\* は 2) で, \*\* は 3) でそれぞれはじめて引用されたもの]

ABSTRACT		SYLLABUS	
Lord Derby*	4	Dr. McSherry	7
Dr. Parkes	3	Dr. Richardson	6
Dr. S. M. Beard*	3	Prof. Blackie	5
Prof. Blackie*	2	Dr. C. F. Folson**	5
MacLaren	2	Dr. W. Mathews**	4
B. W. Richardson	2	Dr. F. H. Hamilton**	4
		Lord Bacon**	4
		Prof. B. G. Wilder**	4
		Dr. F. W. Draper	4
		Thomas Tussur**	3
		Sir H. Thompson**	3
		Dr. Parkes	3
		Pliny**	3
		Dr. J. W. Peebles**	3
		Dr. C. H. Williams**	3

これで見ると、2) は非常に簡略化されるとともに E. ヒッチコック自身の叙述になる部分が割合として多くなったのだが、参照回数 33、参照典拠数 23 と少ない。それでもダービー (Lord Derby) が脳・神経と眼で、ビアード (Dr. S. M. Beard) が肺と脳・神経で、そしてブラッキー (Prof. Blackie) が生活時間に関して、それぞれ新たに引用されている。1 回だけ引用されている人物も入れるとかなり新しい典拠を登場させていたことが分る。

この傾向は、3) になって変る。ページ数は 2) と同様に少ないが典拠数 120、参照回数 181 と増加した。こゝでも、脳と神経でフォルソン (Dr. C. F. Folson)、体育・筋・消化などでマシウス (Dr. W. Mathews)、消化・アルコール・入浴・呼吸器でハミルトン (Dr. F. H. Hamilton)、消化やアルコールでベーコン (Lord Bacon)、アルコール・たばこ・入浴・生殖器などでワイルダー (Prof. B. G. Wilder) 等が引用されている。3 回以下の参照回数のところにも新しい名前が多くみられるし、哲学・文学関係の人物も引用されていて、E. ヒッチコックの円熟ぶりがうかがえる。

iii) とところで、問題はリーランドの体育論講義の典拠との比較である。これも典拠数 50、参

照回数 94 であるが、個別に参照回数が多い順に整理すると以下のようである。

パークス*	13	アクトン	3
フォスゲル	8	ベルツ	3
カーペンター*	5	プルターク	3
ペッテンコーファー*	4	リング	3
ヴォイト	4		
ニーマヤ	4		

\*印をつけたのは、E. ヒッチコックの 1) で挙げられていた名前である。中心的に引用されているのが上位 4 位までに入っている 3 人が E. ヒッチコックの 1) に引用されていた人物である。この他にもブラッキー、フリント、ダルトン、ホートンなども資料 1) で参照されていた人物である。資料 2) はパークス、ブラッキー、ホートンなどが共通だが、かなり異っている。

iv) 以上のように典拠を検討すると、リーランドが最も中心的に依存していた典拠は、E. ヒッチコックが参照した人物たちのものであることが明らかなのであるが、同時に E. ヒッチコックが挙げていなかった典拠もかなり多くみられる。一つにはリーランドの場合体育論講義であったことによってルソー、リングなど必然的に取りあげられなければならないものがあるということと、さらにはハーバードで医学を修めたリーランド自身の学識形成による部分ももちろん働いていたとみられる。さらにはベルツ (Erwin Bälz) から引用している箇所などもみられ、来日してから後の摂取であることが確実であるものがあつた。こうして、リーランドの場合、ヒッチコックと共通の典拠の部分には影響の可能性も考えられるが、それと同時に、リーランドに固有な典拠がかなり多いことにも注目しなければならない。とくに、遺伝や風土に関して論じたことはユニークな点であり、近代体育の形成にとって重要な意義をもつものであつたと云えよう。

#### [IV] 体操伝習所の教科書

以上においては E. ヒッチコックの保健講義

表 1

AUTHOR	Glorify God...	Char act. of Man	Physic, Constant	Viability	Expect. of Life	Rate of ani. Life	Birth Raters	Increase of Life	Death rate	The Bones	The Muscles	Speed and Time
Galen	1											
Sir William Tamms	1											
Samoel Brown	1											
Ohar les Bell		1										
Quinctilian		1										
Holden		1								3		
Frureip		1										
Virchow		1										
Carpenter		4	1									1
Marshall		1									4	1
Cycl. Aoad, and Physiol		1										
Doke of Argyll		1										
Prof. J. D. Dana		1										
Agetessiz		1										
Prof. Quain		3										
Shakeseare		1										
Quetelest			2						2			
Quetelet and Danson			4									
Draper			2	1					1			
Mtlaren			1									
Prof. Huxley			1									
Prof. Brunetti			1									
Wybrand Lolkes			1									
Mr. ans Mrs. Amin			1									
Daniel Rambert			1									
Willard Perkins			1									
Quater fagtes			1									
Dr. B. A. Gould			3									
Ai tkin			1						1			
Dr. Hutchinson			1									
Pettenkofer			1									
Valentin			1									
Dr. Toner				1	1							
Mallet				1								
Dr. Ray				1								
Dr. Nathan Allan				1								
British Resarts				1								
Mass. Board of Health				1				1	2			
Dr. Hovsh				1								
Psalms xo. lo				1								
Apocrypha				1								
Walford				1								
Prof. Owen				1						1		
Buffon				1								
Prof. F. A. Walker					1							
Dr. Guy					1							
Prof. W. C. Esty					1							
E. R. Lankester						1						
Willey								1				
Masses. Rep. Board of Health									3			
Resister General of England									1			
U. S. Census									1			
Dr. E. Jauvis									2			
Dr. George E. Hall									1			
Leheman										1		
Carl Aeby										1		
Berzelius										1		
Gallileo										1		
a good authority										1		
mathematicians										1		
magedies										1		
Beolard										1		
Everard Home										1		
Hudibras										1		
Flint											4	1
Cleland											1	1
Parkers												
Prof. Hovghton												
Helmholtz												1
Lethety												
Gray												
Sappey												
Brinton												
Sanitary Congress of Brussels												
Pooular Sti. Monthly												
Dalton												
William Harvey												
Reid												
Hamond												
West Review												
B. Anetos Smith												
Flareoce Nightingale												
Wilson												
Stegtin												
Kriester												
Wilder												
a Germen saying												
Jounal of Chemistry												
Bain												
Todd and Bowman												
Nicholson												
Homboldt												
Dr. Rood												
Dr. Kitto												
Total	3	18	24	13	4	1	0	2	14	20	9	5



[illegible]

表 2

AUTHOR	(Preface)	Gymnasium Duties	Excuse Sickness	Muscular Exercises	Tabacco	Skin & Bathing	Lungs & Air	Brain & Nerves	Time Schedule	Overwork	The Eyes	Syphylis Horror	TOTAL
Prof. Blackie	1								1				2
Prof. Tyndall	1												1
Mrs. Stowe	1												1
Col. Waring	1												1
MacLaren				1	1								2
Mr. Garfield				1									1
Dr. Parkes				1	1			1					3
King James					1								1
The Lancet					1								1
Dr. Ferguson					1								1
Quar. J. of Scie.					1								1
Dr. Solly					1								1
Edward Hanlon					1								1
B. W. Richardson						1			1				2
John Ericsson							1						1
Dr. S. M. Beard							1	2					3
Lord Derby								2			2		4
Spurgeon										1			1
Prof. Houghton										1			1
Walford										1			1
Dr. McSherry										1			1
Ecclesiastes VII											1		1
Dr. H —												1	1
TOTAL	4	0	0	3	8	1	2	5	2	4	3	1	33



表 3

AUTHOR	Prilim. & General	Physical Edu.	Care of Muscles	Food & Digestic	Alcohol	Tabacco	Skin	Bathing	Breathing Org.	Brain and Mind	Eyes	Reproduct. Org.	The Bible says	TOTAL
Dr. W. Matthews		1	1	1						1				4
Anon		2												2
Dr. H. H. Hamilton		1	1		2					1				1
Prof. Blackie		1												5
Prof. Tyndall														1
Mrs. H. B. Stowe		1												1
Col. Waring		1												1
Carlyle		1												1
W. T. Clark		1												1
R. W. Emerson		1												1
Dr. Lyman Abbott		1												1
Montaigne		1												1
Novalis		1												1
Axel Gustafsen		1												1
Mengen		1												1
Prof. R. Owen		1												1
Carl Voght		1												1
Cicero		1	1											2
Thomas Bishat		1												1
Epictetus		1												1
Spenser		1												1
Carl Betz		1												1
Dr. C. Withington		1												1
Prof. Huxley		1		1										2
Dr. A. L. Gibbon		1												1
O. B. Frothingham			1											1
MacLaren		1		1		1								2
Hamerton		1												2
Dr. Aust in Flint			2											2
Dr. Parker			1	1										2
Plato			1							1				1
Dr. McSherry			1	1	1	1				2		1		7
Dr. D. A. Sargent			1		1			1						2
Dr. Haughton													1	1
Dr. H. N. Martin			1											1
Sir Samuel Baker			1	1						1				1
Thomas Tusser			1							1				3
Congregational			1							1				2
Gen. U. S. Grant			1											1
Dr. A. P. Peabody			1											1
Wesley's Mother			1											1
Hannah Moore			1											1
Dr. F. H. Hamilton				1	1			1	1					4
Shakespeare				2										2
Sir H. Thompson				2	1									3
Dr. Parkes				1	1	1								3
Pliny				3										3
L. Chesterfield				1	1									1
Bouchardt														1
Lord Bacon					1					1				4
Dr. T. R. Allinson				1										1
S. O. Alibone				1										1
Tryon, 1691				1										1
Jeremy Taylor				1										1
Prof. B. G. Wilder					1	1		1				1		4
Dr. G. M. Gregory					1									1
Dr. H. P. Stearns					1	1								2
Dr. Richardson					2	1		1		2				6
Dr. Andrew Clark					1									1

[illegible]

表 4

著者名	緒 言	遺 伝	風 土	風 習	体 操	体育論 第二	体操の効果	体育歴史	計
ローマ人	1								1
ブレイキイ		1							1
カーペンター		5							5
ダアヴン		1							1
ホファカア		1							1
ニュートン		1							1
フォスゲル		4	3		1				8
ニーマヤ		4							4
ハアシ		1							1
ロベルト		1							1
コンスタット		1							1
グラント		1							1
リュクルゴス		1							1
アクトン		3							3
Rallemand		1							1
ベルツ		1	1				1		3
シモンズ			1						1
ブラッキー				1					1
ガレノス					2				2
ヒポクラテス					1				1
ヒロディクス					2				2
プラトン					2				2
パウサニアス					1				1
ヒスモニウス					1				1
プルターク					3				3
デモセニス					1				1
ホフマン					1				1
Dryden					1				1
R. ベーコン					1				1
フランク					1				1
モンテーニュ					1				1
ヒュフランド					1				1
ルソー					1				1
リング					3				3
パークス					1		12		13
C. ビーチャー					1				1
生理学者						1			1
テルロー						2			2
トレビラネユース						1			1
ブリント						1			1
ベッテンコーファー							4		4
ヴォイト							4		4
ダルトン							1		1
ウィンシップ							1		1
エ・スミス							1		1
ディヴィ							1		1
ホートン							1		1
ヘロダス等								1	1
ホーマー								1	1
クセノフォン								1	1
計	1	27	5	0	26	5	26	3	94

資料と G. A. リーランドの『李蘭士氏体育論講義』の内容構成に関連して、その典拠とされたものを比較検討した。しかし、この典拠とされたものについて考察する場合に、体操伝習所で使用された教科書についてもみておく必要がある。すでに、大場一義氏がふれられたことがあるが<sup>27)</sup>、1882(明治15)年7月1日付文部省地方学務局長辻新次名で東京府知事宛に行われた体操伝習所卒業生の任用方有無の照会の文書(普学第992号<sup>28)</sup>)は、体操伝習所生徒が履修した学科の教科書、参考書を次のように示している。

#### 解剖、生理、健全学科教科書目

華氏解剖接要	村上典表訳
達爾頓氏生理書	物部誠一郎訳
生理提要	小林義直訳
健全学	杉田玄端訳

以上著訳書ニ就キテ修ム

解剖生理健全学	「ヒッチコック」氏著
同 書	「オットル」氏著
生理書	「ハックスレー」氏著
生理健全学	「ダルトン」氏著

以上洋書ニ就キテ修ム

#### 右三科ノ参考書目

解剖生理諸図式	
解剖攬要	
解剖訓蒙	
医科全書解剖篇生理篇	
普徠氏組織学	三浦省軒・
	長谷川順二郎訳

#### 生理科健全学科ノ口授書取ニ供セシ洋書ノ概目

ダルトン氏著	大生理学
バック氏著	大健全学
バルク氏著	大健全学
グレー氏著	大解剖学
ハックスレー氏・	
ユーマン氏著	大生理健全学

[以下略]

以上の教科書・参考書について云うと、物部誠一郎訳『達爾頓氏生理書』の著者はダルトンであり<sup>29)</sup>、洋書でもダルトン氏著『生理健全学』が用いられ、口授書取用洋書でもダルトン氏著「大生理学」が挙げられている。

小林義直訳『生理提要』はハックスレー著であり<sup>30)</sup>、これも洋書で「ハックスレー」氏著『生理書』が示され、口授書取でもハックスレー氏、ユーマン氏著『大生理健全学』が挙げられている。この他ではグレー氏著『大解剖学』も示されているが、これが資料1)中の Gray と同一人物か否か不明である。また、「バルク氏」は Dr. Parkes であろうとみられる。さらに、「ヒッチコック」氏著『解剖生理健全学』が参考書目の筆頭に挙げられているが、これが Hitchcock, E., Elementary Anatomy and Physiology, N. Y. 1875 を指しているのか、これには健全学に相当する語が入っていないので断定できないが、その可能性は強い。

こうした不確実な点は、今後さらに究明すべき課題として残さなければならないが、ともあれ上述したように G. A. リーランドの指導によって整備され、卒業生を送り出すに至った体操伝習所で用いられた教科書、参考書は、その医学的な専門知識に関する分野に関して云うと、その半ば以上のものは、E. ヒッチコックの資料1)の中で典拠として示された人物の著書(原書または訳書)であったことが確認できる。この点から、体操伝習所における体育理論形成の基礎となった医学的知識、理論に関しては、アマーフト大学の保健講義と通底する部分かなりあったとみることができるといえよう。

## [V] 結 語

以上において考察してきたところから以下のような結論を導くことができる。

- 1) 体操伝習所における体育教員養成の際の医学的知識の教育には、アマーフト大学の保健講義資料の初期のもので引用していた医学者の文献が大幅にとり入れられてい

た。

- 2) G. A. リーランドの『李蘭士氏講義体育論』は、E. ヒッチコックの保健講義資料が初期においては体系的で、事実・法則の認識を中心とする態度であったのに対して、体系的論述である点は同じでありながら、直接に運動（体操）の効果を基礎づける応用的な展開をしていた。
- 3) G. A. リーランドの上記の書は、E. ヒッチコックの資料が典拠とした主な学者に依拠しているが、それ以外にも独自の典拠を求めていた。この点では、同じくハーバード大学医学部卒業者という医学知識の共有ということと G. A. リーランドが E. ヒッチコックの教え子であったところからの影響というものが切り離し難く、からみ合っていたとみななければならない。リーランドが遺伝と風土の問題を論じていたことはユニークな点であり、近代体育の形成に重要な意義をもつものであった。
- 4) キリスト教信仰の点では、E. ヒッチコックの保健講義資料はその立場を明確に表明しているのに対して、G. A. リーランドの場合『李蘭士氏講義体育論』では基本的にはキリスト教的世界観、人間観を基礎としながらも抑制的で、直接に表明することをしなかった。

[付記] 本研究は、平成7年度中京大学特定研究助成による研究成果の一部である。

#### [注および参考文献]

- 1) 今村嘉雄『十九世紀に於ける日本体育の研究』不昧堂、1967年
- 2) 同『学校体育の父 リーランド博士』不昧堂、1968年
- 3) 能勢修『明治期学校体育の研究』不昧堂、1995年
- 4) 拙稿(1992)『軽体操』の思想に関する一考察——アマースト大学の体育論の受容とその限界——」中京大学体育学論叢, Vol. 32, No. 2, 1-12.
- 5) 同(1991)「体操伝習所の『活力統計』に関する一考察」中京大学体育研究所紀要, No. 5, 1-20.
- 6) 同(1995)「アマースト大学の体育論に関する考察——日本への導入に関連して——」中京大学体育研究所紀要, No. 9, 15-24.
- 7) 杉本政繁「『アマースト大学の体育』における体育論の体育思想史的考察」体育学研究, Vol. 23, No. 4, 305-312, 1979.
- 8) 木下秀明(1991)「体育制度の推移から見たアマースト大学の体育理念」日本大学人文科学研究所『研究紀要』No. 41, 143-156.
- 9) 『李蘭士氏講義体育論』(今村『学校体育の父 リーランド博士』前出, 所収。原本は筑波大学中央図書館所蔵)
- 10) Nathan, Allen: 'Physical Culture in Amherst College', Stone and Huse, (1869) p. 9.
- 11) Fuess, Claude Moore: 'Amherst — The Story of a New England College', Little, Brown, & Co., 1935, p. 135.
- 12) Gerber, Ellen W.: Innovators and Institutions in Physical Education, Lee & Febiger, 1971, p. 278.
- 13) Ibid., p. 278.
- 14) Duc, Thomas Le: Piety and Intellect at Amherst College, 1865-1912, Arno Press & New York Times, 1969, (reprint ed.) [first ed., Columbia Univ. Press], 1946 p. 130.
- 15) 今村, 『学校体育の父 リーランド博士』(前出), p. 61-63年譜および p. 88の『李蘭士氏講義体育論』の解題を参照。
- 16) Hitchcock, Edward: A Part of the Course of Instruction given in the Department of Physical Education and Hygiene in Amherst College, the Gazette Printing Co., Northampton, Mass. 3, 1876 (アメリカ議会図書館所蔵).



- 17) Hitchcock, E. : A Syllabus of the Health Lectures in Amherst College 1888-9, press of C. A. Bangs & Co., (アメリカ議会図書館所蔵), 1888 p. 4.
- 18) 拙稿「『軽体操』の思想に関する一考察——アマースト大学の体育論の受容とその限界——」中京体育学論叢, Vol. 32, No. 2 (前出) および拙稿「アマースト大学の体育論に関する考察」中京大学体育研究所紀要, No. 9 (前出) 参照。
- 19) 今村, 前掲書, p. 89.
- 20) Duc, T. L. : op. cit., 131.
- 21) Hitchcock, E. : An Abstract of Lectures on Health, to the Freshman of Amherst College, 1880, Amherst, Press of C. A. Bangs & Co., (アマースト大学図書館所蔵), 1880 p. 7.
- 22) Hitchcock, E. : A Syllabus of the Health Lectures in Amherst College, 1888-9 p. 35-37.
- 23) 今村, 前掲書, p. 95.
- 24) Hitchcock, E. : A Part of the Course of Instruction given in the Department of Physical Education and Hygiene in Amherst College, 1876, p. 13.
- 25) Ibid., p. 49.
- 26) Ibid., p. 57.
- 27) 大場一義「体操伝習書卒業生徒に関する研究——学歴と職歴を中心として——」昭和62年日本体育学会体育史専門分科会秋季研究集会発表資料, 1987.
- 28) 「往復録」官省往復, 明治15年, 東京府学務課, 東京都公文書館所蔵, 普学第992号。
- 29) 国立図書館ならびに内閣文庫所蔵。
- 30) 同上。